

【研究1-3】

研究課題

育児期にある夫婦ペアレンティング

—母親の促進行動と批判行動への影響要因—

1. 緒言

夫婦はどのように“二人で協力して子育てを行うのか”、夫婦ペアレンティングに関して、近年の米国では、二人親家庭におけるコペアレンティング研究として急速に発展を見せている。

研究者による母親の心身の縦断研究¹⁾では、育児において父親の存在は大きいことが明らかになっている。また、子育てには父親が欠かせないと考えられているが、実際我が国における子育て研究の子どもに対する父親への実際的な関わりの協働やその調整について検討されていない²⁾³⁾。

そこで、研究者は夫婦ペアレンティングについて研究をスタートさせ、夫婦ペアレンティングの促進行動と批判行動のパターンの実態から、夫婦ペアレンティング調整の「促進行動が高く(いつもある)批判行動が低い(少ない)」パターンが、夫婦共に心理的に良い状態を示していることを明らかにした。それは、育児幸福感が高く、育児ストレスが低い。さらに納得する話し合いがされており、「夫への理解・支援」、「妻への理解・支援」、「相思相愛」が高い、互いに思いやりの気持ちがあることがわかった⁴⁾。

子育て期にある夫婦の協力についての研究では、妻による夫関与への抑制要因、すなわち子どもを任せられない状態(gatekeeping)だけではなく、促進要因の存在が指摘されている²⁾。また、母親の育児への自信が、子どもの成長とともに減少し、夫へ相談しないほど自信がないこと⁵⁾が明らかとなっている。そこで、本研究では、3歳以降4歳までの子どもをもつ子育てをしている母親の夫婦のペアレンティングにおける、促進行動と批判行動に着目し、母親による父親に対する育児の促進は、父親の育児関与を高め、それにより母親は父親の促進をさらに高め批判が低減する母親の促進行動、批判行動に影響する要因を探るため、先行研究⁴⁾による母親のデータの再度分析を行ない、新たな知見を得られたため報告する。

促進行動と批判行動に影響する要因を明らかにすることは、先行研究に加え、具体的な行動に対する支援を検討する上で重要な視点であると考え。本研究が夫婦をペアとしてとらえ夫婦の子育てにおける夫婦間調整、すなわち望ましい育児環境を整えていくことの一助となると考える。夫婦ペアレンティングの調整により良好な子育てが行われることは、育児を次の親世代に引き継ぐことに通じるものと考え。

2. 研究目的

母親自身が捉えた母親の夫婦ペアレンティングである促進

行動と批判行動に影響する要因を明らかにする。

3. 研究方法

(1) 調査対象

3歳から4歳の子どもをもつ母親、600人に調査用紙を配布した。

(2) 調査期間

調査期間は2018年10月から2018年12月であった。

(3) 依頼方法

X県に位置する幼稚園並びに子育て支援センターへ調査協力をお願い文と共に質問紙を同封し直接研究者が説明をして施設管理者に協力を依頼した。母への質問紙の依頼文には、回答後自身の質問紙を別の封筒に入れて封をして園または、センターに持参すること、調査の協力にあたり、調査に協力をしない場合や途中で辞退しても不利益がないこと、利益として子育てにおける自分の考えや思いを振り返る機会となることを明記した。調査用紙は施設責任者から対象者に配布され、回収は施設に設置された回収箱に入れ匿名性を担保した。調査は無記名で行ない、調査用紙の表紙の同意チェック欄にチェックされた場合は、研究への同意が得られたものとした。

(4) 研究デザイン

尺度を用いた選択的回答並びに記述式質問項目による自記式質問紙調査による研究

(5) 調査内容

選択的回答

- ◇ 清水らによる尺度(育児幸福感尺度短縮版¹⁵⁾、育児ストレス尺度短縮版¹⁶⁾
 - 子育てをしていて感じる幸せな気持ちについて
 - ・子どもとの絆
 - ・育児の喜び
 - ・夫への感謝
 - 子育てをしていてつらいと感じることについて
 - ・心身的疲労
 - ・育児不安
 - ・夫の支援のなさ
- ◇ 子どもが生まれる前に親としての実感の有無
- ◇ 出産後の生活のイメージの有無
- ◇ 里帰り出産により夫婦別生活の有無
- ◇ 母親が行う父親の子育て関与を促進する行動と批判する行動について夫婦ペアレンティング調整尺度¹²⁾
 - ・促進行動

・批判行動

- ◇ 自分の性格について自己志向的完全主義尺度¹⁷⁾
 - ・高い目標
 - ・完全でありたい
 - ・ミスを気にする
 - ・自分の行動に漠然とした疑いをもつ

- ◇ ジェンダーに関する影響が示唆されていることから¹¹⁾結婚の現実尺度¹⁸⁾の認識について
 - ・相思相愛
 - ・夫への理解・支援
 - ・妻への理解・支援

- ◇ 夫婦の話合いが関係していることから¹⁷⁾子どもが生まれてからの生活についての話し合い
 - ・話し合いの有無
 - ・話し合いの時期
 - ・話し合いの頻度
 - ・話し合いの内容に納得したか

自由記述式回答

- ◇ 育児行動を批判されたときどのように感じ受け止めたか
- ◇ 批判的な行動の背景にあるものについての考え
- ◇ 結婚後相手の生活態度に変化について 感想も含む
- ◇ 年齢
- ◇ 子どもの人数
- ◇ 子の年齢
- ◇ 同居家族
- ◇ 就労形態

表1 母親の夫婦ペアレンティング調整尺度得点と属性の比較

N=291

	促進				批判						
	Mann-Whitney U		低群 高群		Mann-Whitney U		低群 高群				
	N	p	N	N	χ^2	p	N	N	χ^2	p	
母親としての実感は子どもを産む前からあった											
いいえ	200	.13	108	92	1.54	.21	.55	91	109	0.64	.42
はい	91		42	49				46	45		
出産後の生活のイメージは実際と変わらない											
いいえ	234	.13 *	125	109	1.68	.20	.48	107	127	0.88	.35
はい	57		25	32				30	27		
里帰り出産により夫と別生活がしばらくあった											
いいえ	125	.13	66	59	0.14	.71	.73	58	67	0.04	.84
はい	166		84	82				79	87		
子どもが生まれてからの生活について夫と話し合った											
いいえ	55	.00 *	43	12	19.3	.00 *	.20	31	24	2.35	.13
はい	236		107	129				106	130		
話し合いに納得していない	84	.00 *	52	32	14.4	.00 *	.00 *	26	58	10.3	.00 *
した	152		55	97				80	72		
話し合いの頻度											
数えられる程度	87	.00 *	48	39	5.38	.02 *	.90	39	48	0.00	.98
数え切れない程度	149		59	90				67	82		
末子年齢											
2歳以下	101	.05 *	45	56	3.03	.09	.90	49	52	0.13	.81
3歳以上	190		105	85				88	102		
仕事をしている											
いいえ	159	.09	80	79	0.21	.64	.70	76	83	0.07	.79
はい	132		70	62				61	71		
子ども数											
1人	54	.97	27	27	0.63	.88	.99	25	29	0.16	1.00
複数(2人以上)	237		120	114				112	125		

*: χ^2 (両側検定)

Mann-Whitney U test

連関性を見るために χ^2 検定を行った。

母親を対象に夫婦ペアレンティング調整の意識調査の回答結果、母親の促進行動得点、批判行動得点をそれぞれ中心傾向中央値からパーセンタイル値等サイズ2グループに算出し得点を高群と低群の2群に分けた。この2群の比率に有意差が認められたものは、促進は「子どもが生まれてからの生活について夫と話し合い」、「話し合いに納得」「話し合いの頻度」、批判は「話し合いに納得」であった。

(2)「育児ストレス」「育児幸福感」「自己志向的完全主義」「結婚の“現実”」の促進行動と批判行動の高低群比較

促進得点は低群~29以下、高群30以上~、批判得点は低群~16以下、高群17以上~とした。母親の下位尺度得点と夫婦ペアレンティング調整尺度高低群間の比較は表2に示す。

(6)研究倫理

調査の依頼文には、自由意思による協力であること、回収した後は番号化して処理し、入力したデータを研究結果公表後破棄することを明記した。倫理審査は名古屋学芸大学倫理委員会の審査を受け2017年に承認(#274)を得た後に研究を開始した。

4. 結果

(1)対象者の属性と子育て状況

調査用紙の回収は294人(49.0%)、その内有効回収は291人(48.5%)であった。結果を表1に示す。

核家族が9割以上、就業状況は、専業主婦51.9%、パートタイム33.7%、フルタイム3.8%であった。

出産前に親としての実感をもっていった母親は31.3%、産後の生活イメージとのギャップを感じていた母親は80.4%いた。また、子どもが生まれてからの生活についての話し合いの状況では、話し合いは81%が行っていた。

表2 下位尺度得点と夫婦ペアレンティング調整尺度得点2群間との比較 N=291

夫婦ペアレンティング調整尺度 高低2群	項目 の数	α 係数	促進行動				p
			高群 N=141		低群 N=150		
			MEDIA N	Mean±SD	MEDIA N	Mean±SD	
促進得点	9	0.88	37.0	37.60 ± 6.22	23.0	22.71 ± 4.72	
批判得点	7	0.86	17.0	17.62 ± 5.91	18.0	18.72 ± 7.14	
育児幸福感							
子どもとの絆	4	0.73	18.0	16.93 ± 2.93	17.0	16.22 ± 3.10	.00 *
育児の喜び	5	0.84	25.0	23.30 ± 3.06	24.0	22.97 ± 2.44	.02 *
夫への感謝	4	0.78	19.0	18.28 ± 2.12	16.0	15.47 ± 3.40	.00 *
育児ストレス							
心身的疲労	6	0.84	16.0	15.81 ± 5.19	17.0	16.45 ± 5.97	.36
育児不安	6	0.83	11.0	12.21 ± 5.14	15.0	14.25 ± 5.25	.00 *
夫の支援のなさ	4	0.87	7.0	7.63 ± 3.46	12.0	11.71 ± 4.58	.00 *
自己志向的完全主義							
高い目標	5	0.81	17.0	16.34 ± 5.05	15.5	15.43 ± 4.94	.14
完全でありたい欲求	5	0.88	16.0	16.26 ± 5.81	15.0	15.33 ± 5.20	.14
ミスを気にする	5	0.79	13.0	13.29 ± 5.23	13.0	13.60 ± 4.40	.43
自分の行動に漠然とした疑いを持つ	5	0.79	18.0	17.61 ± 5.44	17.0	17.42 ± 5.35	.66
結婚の“現実”							
相思相愛	4	0.89	16.0	16.25 ± 2.64	16.0	14.43 ± 3.32	.00 *
夫への理解・支援	4	0.68	15.0	14.95 ± 2.46	14.0	13.59 ± 2.76	.00 *
妻への理解・支援	4	0.69	14.0	14.38 ± 2.51	13.0	13.06 ± 2.96	.00 *
夫婦ペアレンティング調整尺度 高低2群							
			批判行動				
			高群 N=154		低群 N=137		
			MEDIA N	Mean±SD	MEDIA N	Mean±SD	
促進得点	9	0.88	28.5	28.79 ± 8.50	30.0	31.20 ± 9.91	
批判得点	7	0.86	22.0	22.99 ± 5.26	13.0	12.79 ± 2.41	
育児幸福感							
子どもとの絆	4	0.73	17.00	16.33 ± 3.15	18.00	16.82 ± 2.88	.16
育児の喜び	5	0.84	24.00	23.13 ± 2.86	24.00	23.13 ± 2.65	.69
夫への感謝	4	0.78	17.00	16.18 ± 3.34	18.00	17.57 ± 2.80	.00 *
育児ストレス							
心身的疲労	6	0.84	16.00	15.93 ± 5.93	16.00	16.37 ± 5.24	.49
育児不安	6	0.83	14.00	14.06 ± 5.53	12.00	12.37 ± 4.87	.01 *
夫の支援のなさ	4	0.87	11.00	10.63 ± 4.71	8.00	8.72 ± 4.16	.00 *
自己志向的完全主義							
高い目標	5	0.81	16.00	16.20 ± 4.90	16.00	15.50 ± 5.12	.32
完全でありたい欲求	5	0.88	16.00	16.45 ± 5.18	15.00	15.03 ± 5.80	.03 *
ミスを気にする	5	0.79	13.00	13.81 ± 4.59	13.00	13.05 ± 5.04	.16
自分の行動に漠然とした疑いを持つ	5	0.79	18.00	17.82 ± 5.22	17.00	17.17 ± 5.57	.33
結婚の“現実”							
相思相愛	4	0.89	16.00	14.64 ± 3.30	16.00	16.07 ± 2.78	0.00 *
夫への理解・支援	4	0.68	14.00	13.66 ± 2.70	15.00	14.92 ± 2.55	0.00 *
妻への理解・支援	4	0.69	14.00	13.49 ± 2.85	14.00	13.93 ± 2.79	0.21

*p<0.05 Mann-Whitney U test

下位尺度得点と夫婦ペアレンティング調整尺度得点高低 2 群間との比較において、有意な差が見られた項目は、促進行動では育児幸福感の「子どもとの絆」「育児の喜び」「夫への感謝」、結婚の現実の「相思相愛」「夫への理解・支援」「妻への理解・支援」、育児ストレスの「育児不安」「夫の支援のなさ」で、育児幸福感、結婚の現実が高群の得点が高く、育児ストレスは高群の得点が低い。

批判行動は育児幸福感の「夫への感謝」、育児ストレスの「育児不安」「夫の支援のなさ」、自己志向的完全主義の「完全でありたいという欲求」、結婚の現実の「相思相愛」「夫への理解・支援」であった。育児幸福感と結婚の現実は低群の得点が高く、育児ストレスと自己志向的完全主義は高群の得点が高い。

(3) 夫婦ペアレンティングにおける母親の促進行動と批判行動の影響要因

促進行動：高い=1 低い=0、 批判行動：高い=1 低い=0 を 2 値とした目的変数で、それぞれロジスティック回帰分析を行った。夫婦ペアレンティング尺度による促進行動と批判行動に影響していた要因を表3に示す。

モデル係数のオムニバス検定有意確率は促進行動・批判行動とも.01%未満でモデル式の有意性が保証された。Hosmer と Lemeshow の検定結果の有意確率は促進行動が.517、批判行動は.262、共に.05 以上なので求めたモデルがデータに適合していることを確認した。

表3 二項ロジスティック回帰分析結果 促進行動、批判行動に影響する要因 N=291

影響要因	オッズ比	95% 信頼区間		p
		下限	上限	
促進行動				
夫への感謝	1.31	1.13	1.51	.00
夫の支援のなさ	0.86	0.80	0.93	.00
話し合い(有)	2.77	1.26	6.08	.01
批判行動				
夫への感謝	0.90	0.83	0.99	.02
完全でありたい欲求	1.07	1.02	1.12	.00
夫への理解・支援	0.84	0.76	0.93	.00

p 値有意差 5%未満から促進行動は「夫への感謝」、「夫の支援のなさ」、「話し合いが有る」、批判行動は「夫への感謝」、「完全でありたい欲求」、「夫への感謝・支援」が影響を与えていることがわかった。

オッズ比の値から各変数が 1 増加した時に、「促進行動または、批判行動が高くなりやすくなるか」がわかる。

促進行動「夫への感謝」1.31 倍、「話し合いが有る」2.77 倍となり、「夫の支援のなさ」は 0.86 倍で減少する。「夫の支援のなさ」は促進行動を高くする関連性は低い。

批判行動は「完全でありたい欲求」が 1.07 倍となるが、「夫への感謝」は 0.90 倍、「夫への理解・支援」は 0.84 倍で減少させる。

このモデル（回帰式）に基づいて促進行動または、批判行動が高くなるか、ならないかを予測した結果、全体で正しく予測したのは（正答率）促進行動は 75.4%、批判行動は 65.6%であった。

有意となった下位項目及び構成されている質問項目、平均値等について表4に示した。

表4 二項ロジスティック回帰分析結果 影響要因の現状 N=291
説明変数 目的変数

説明変数	目的変数									
	促進行動					批判行動				
	低群=0					高群=1				
	MEDI		MAX	Mean	SD	MEDI		MAX	Mean	SD
	MIN	AN				MIN	AN			
夫への感謝										
夫が育児に協力してくれることに感謝するとともに安心だ	1	4	5	4.1	± 1.1	2	5	5	4.8	± 0.5
夫が疲れて帰ってきて子どもの様子を探ねたり話しに耳を傾けてくれることに感謝している	1	4	5	3.5	± 1.4	1	5	5	4.5	± 0.8
夫婦が協力して育児している姿を子どもに見せていることに誇りを感じる	1	3	5	3.2	± 1.1	1	4	5	4.1	± 1.0
夫も見て喜ぶ子どもを見て笑顔になる家族を見て幸せを感じる										
夫の支援のなさ										
夫は子育てに協力的でない	1	3	5	2.7	± 1.3	1	1	5	1.7	± 1.0
子どもより自分の生活を中心に考えている	1	4	5	3.2	± 1.4	1	2	5	2.2	± 1.2
妻の育児生活の苦勞を理解していない	1	3	5	3.1	± 1.3	1	2	5	2.0	± 1.2
夫の育児では不完全で迷惑	1	3	5	2.7	± 1.4	1	2	4	1.8	± 0.9
話し合い										
	12	24	29	23.5	4.1	30	37	54	37.7	6.2
夫への感謝										
夫が育児に協力してくれることに感謝すると共に安心だ	1	5	5	4.6	± 0.8	1	5	5	4.3	± 1.0
夫が疲れて帰ってきて子どもの様子を探ねたり話しに耳を傾けてくれることに感謝している	1	5	5	4.3	± 1.0	1	4	5	3.7	± 1.4
夫婦が協力して育児している姿を子どもに見せていることに誇りを感じる	1	4	5	3.9	± 1.1	1	3	5	3.4	± 1.1
夫も見て喜ぶ子どもを見て笑顔になる家族を見て幸せを感じる										
完全でありたい欲求										
どんなことでも完璧にやり遂げることが私のモチベーションである	1	2	6	2.6	± 1.4	1	3	6	3.0	± 1.3
物事は常にうまく出来ていないと気が済まない	1	3	6	2.9	± 1.4	1	3	6	3.3	± 1.3
中途半端な出来では我慢できない	1	3	6	3.1	± 1.3	1	3	6	3.4	± 1.2
できる限り完璧であろうと努力する	1	4	6	3.4	± 1.4	1	4	6	3.8	± 1.2
やるべきことは完璧にやらなければならない										
夫への理解・支援										
妻が夫の才能・能力を高めそれを伸ばす手助けをする	1	4	5	3.9	± 0.8	1	4	5	3.5	± 0.9
妻が夫の仕事・活動を理解し支える	2	4	5	4.1	± 0.7	2	4	5	4.0	± 0.7
妻が夫を立てる	1	4	5	3.7	± 0.9	1	3	5	3.2	± 1.0

※記述統計量記載無しの項目は影響の関連性が見られなかった

5. 考察

本研究結果において、対象である母親は専業主婦が52%を占めていた。夫と妻が遂行する育児の総量を100としたとき、それぞれが分担する割合について、妻と夫の育児分担割合は妻が8割前後、夫が2割前後でほぼ横ばいで推移しており、妻の分担割合が夫を圧倒的に上回っている。そして妻が専業主婦の場合、妻の育児分担割合が9割以上の割合は

56%と最も高くなる¹⁷⁾。専業主婦の育児負担が高いことが夫婦ペアレンティングにおいて、促進行動や批判行動に影響を及ぼすのか分析したが有意な差はなかった。

子どもが大きくなるにつれて夫の協力が低くなっていくことから¹⁾、促進行動を増やそうとする行動につながるものと考えられる。

母親の属性要因との検討において、その多くが促進行動に関連があることが分かった。つまり、促進行動を促す支援が有効と推察される。促進行動には、夫との話し合いがあること、納得していること、数え切れないほどの話し合いをしていること、が有意な結果から、話し合いを行うこと、話し合いを多く行うこと、話し合いで納得することが大切になると考えられる。夫婦関係構築のために、妊娠期から育児期においてどのような子育てをしたいのか、育児中の生活スタイルなど夫婦で折り合いをつける育児プランを作成し話し合いを行っていくことで、お互いの価値観を知ることの重要性が示されている¹⁸⁾。特に、話し合いで納得することは、促進行動を高めるばかりか、批判行動も高めることに有意となっている。納得の属性、先行要件、帰結¹⁹⁾の結果によると、納得とは「ある事象に対して自分のもつ価値や自分への利益を明確にすることで理解を深め、認知的にも感情的にも受容された状態であり、主観的かつ他者との信頼関係の中で生みだされる流動的な状態」とされている²⁰⁾。納得することは、人の考えや行動などを十分に理解して心得ることを意味し、他人の意見や他の物事を受け入れることになる。そのことが、母親が父親への促進行動を促すと考えられる。

しかし、話し合いに納得することにより促進行動が高いにもかかわらず批判行動も高くなることもある。それは、自身の性格として、夫が協力してくれても自分の思ったとおりにいなければ攻撃するか、あきれてしまい何も言わない。完璧志向が子育てに影響していること、母親の完璧でないことが気が済まないのにそれが育児に反映されていないことが考えられる。今回、批判行動を増加させる要因に、自己志向的完全主義「完全でありたいという欲求」が分析からも明らかになった。

母親の促進行動は「夫への感謝」、「夫の支援のなさ」、「話し合いが有る」、批判行動は「夫への感謝」、「完全にありたい欲求」、「夫への感謝・支援」が影響要因とわかった。先行研究⁴⁾でも夫婦の心理状態が良好であれば、促進行動がよく見られていることが示唆されている。

結婚の“現実”に対する満足度は、育児能力に影響し、結婚の満足度の高いカップルは、互いに心が乱され他に心をとらわれないから、子どもの合図や信号にすぐ気が付くことができる。その上、自分個人のやり方にとらわれずに喜んで子どもに協働作業のペースを決めさせることができる²¹⁾。それは、子どもにとって大切なこと、安定して子育てができることに通じるものと考えられる。

本研究において、「夫への感謝」「夫の支援のなさ」「話し合い(有)」「完全でありたいという欲求」は、母親の夫婦の相互の関係への影響について知ることができると考えられる。夫婦が互いに相手を尊重しサポートしようとする姿勢が重要だといわれている²²⁾ことから本結果を裏づけているといえる。

特に“完全でありたいという欲求”は、夫婦ペアレンティングを阻害する要因として働き、夫婦の愛情にも関係すると考えられた。母親の育児困難感と完全主義との関連性は明らかにされており²⁵⁾、完全主義傾向を軽減できるエンパワーされた関係の支援の必要性が指摘されている。本研究では批判行動を高める夫婦ペアレンティングであったが、安心できる人達との関わりによって、夫婦ペアレンティングへの意味のある影響が期待される。なお、本研究は横断研究であり現時点の夫婦ペアレンティングを明らかにするものである。今後、縦断研究を行い、育児期における夫婦ペアレンティングの変化に着目した研究を行うことが課題である。

6. 結論

夫婦をペアとしてとらえ夫婦の子育てにおける夫婦間調整をうまく機能させるためには、母親が夫婦の関係に満足でき、話し合いに納得できることが大切になる。それらの積み重ねにより、夫婦の愛情が継続することに着目した夫婦への支援が示唆された。

本研究の限界は、コホート研究によるものではないこと、また地域に限定された調査であることから偏りがあることが考えられる。

引用文献

- 1)清水嘉子. 乳幼児の母親の心身の状態に関する縦断研究. 日本助産学会誌. 2017, 31(2),120-129.
- 2)加藤道代, 黒澤泰, 神谷哲司. 母親の gatekeeping に関する研究動向と課題—夫婦ペアレンティングの理解のために. 東北大学院教育学研究科研究年報.2012, 61(1), 9-126.
- 3)加藤道代, 黒澤泰, 神谷哲司. コペアレンティング—子育て研究におけるもう一つの枠組み. 東北大学院教育学研究科研究年報. 2014,63(1), 83-102.
- 4)清水嘉子. 子育て期にある夫婦ペアレンティング調整パターンと関連要因. 母性衛生. 2020 , 61(2),340-351.
- 5)Mchale,J.P. Overt and covert coparenting processes in the family. Family process. 1997, 36, 183-201.
- 6)桜井茂男,大谷佳子. “自己に求める完全主義”と抑うつ傾向および絶望感との関係. 心理学研究.1997,68(3),179-186.
- 7)清水嘉子, 関水しのぶ, 遠藤俊子. 母親の育児幸福感尺度の短縮版尺度開発. 日本助産学会誌.2010, 24(2), 261-270.
- 8)清水嘉子. 母親の育児ストレス尺度—短縮版作成と妥当性

の検討—子どもの虐待とネグレクト.2010 ,12(2), 261-270.

- 9)柏木恵子, 平山順子. 結婚の“現実”と夫婦関係満足度との関連性—妻はなぜ不満か—. 心理学研究.2003, 74(1), 122-130.
- 10)加藤道代, 黒澤泰, 神谷哲司. 夫婦ペアレンティング調整尺度作成と子育て時期による変化の横断的検討. 心理学研究. 2014 , 84(6), 566-575.
- 11)Cowan, P.A. ,Cowan, C.P. What an intervention design reveals about how parents affect their children’s academic achievement and behavior problems. In Brokowski, J. G., Ramey, S. L.,Bristol-Power, M. (Eds.) Parenting and the child’s world:Influences on academic,intellectual,and social-emotional development. London: Lawrence Erlbaum Associates. 2002, 75-97.
- 12)清水嘉子. 育児期にある夫婦ペアレンティング—互いの育児の批判をめぐって—. 日本助産学会誌.2020, 34(1),103-113.
- 13)清水嘉子, 関水しのぶ, 遠藤俊子,他. 母親の育児幸福感—尺度の開発と妥当性の検討—. 日本看護科学学会. 2007, 27(2), 15-24.
- 14)清水嘉子. 育児環境の認知に焦点をあてた育児ストレス尺度の妥当性に関する研究. ストレス科学. 2001, 16(3), 176-186.
- 15)Van Egeren LA. The Parental Regulation Inventory. Michigan State University. East Lansing Unpublished manuscript. 2000.
- 16)三重野洋子,濱口佳和. 乳幼児を持つ母親における子育て完全主義傾向と育児ストレスの関連. 筑波大学心理学研. 2005, 29,109-116.
- 17)国立社会保障・人口問題研究所(編). 2018年第6回全国家庭動向調査 .2019. < http://www.ipss.go.jp/ps-katei/j/NSFJ6/Kohyo/NSFJ6_gaiyo.pdf > (アクセス2021年3月18日)
- 18)片岡優華. 妊娠期から育児期における夫婦の葛藤と意思決定に関する文献レビュー. 創価大学看護学部紀要.2015, 1, 3-13.
- 19)Rodgers,B.L. Concepts and the development of nursing knowledge the evolutionary cycle. Adv Nurs. 1989, 14(4),330-335.
- 20)今井芳江,尾西智恵美,坂東孝枝. 納得の概念分析—国内文献レビュー—. 日本看護研究学会誌.2016,39(2),73-85.
- 21)Belesky,J., kelly, J. The Transition to Parenthood 子供を持つと夫婦に何が起こるか. 安次嶺佳子訳 .東京, 草思社, 1995, 10-60, 133-167.

- 22)Van Egeren,L.A.The developpent of the coparenting relationship over the transition to parenthood.Infant Mental Hearth Journal. 2004, 25,453-477.
- 23)Schoppe-Sullivan,S.J.,Mangelsdorf,S.C.,Brown,G.L.,at a l.Goodness offit in family context:Infant temperament,marital quality and early coparenting behavior.Infant Behav Dev. 2007,30,82-96.
- 24)Belsky,J.,Hsieh,K.H.,Cnic,k.Mothering,fathering,and infant negativity as antecedents of boys' externalizing problems and inhibition at age 3years:differential susceptibility to rearing experience ? Development and Psychopathology. 1998,10,301-319.
- 25)後藤亜紀, 西村真実子.母親の完全主義と育児困難・エンパワーされた経験の関係.石川看護雑誌.2020, 17, 23-36.
- 清水嘉子.育児期にある夫婦ペアレンティング・母親の促進行動と批判行動への影響要因.母性衛生.採択 2022. 63(1)掲載予定 一部加筆